

(四) 香取神名記(伊藤泰歳著) 抜粋

香取神宮の神官及び近郷の人民、重事ある時と歳旦と月の朔望とには、側高山の麓利根川の汀に至り、藻幣を執り、該社の御手洗井に至りて身潔をなして、先づ側高神社を拝礼し、それより香取神宮を拝礼する旧例なり。

(註) 左の差定について

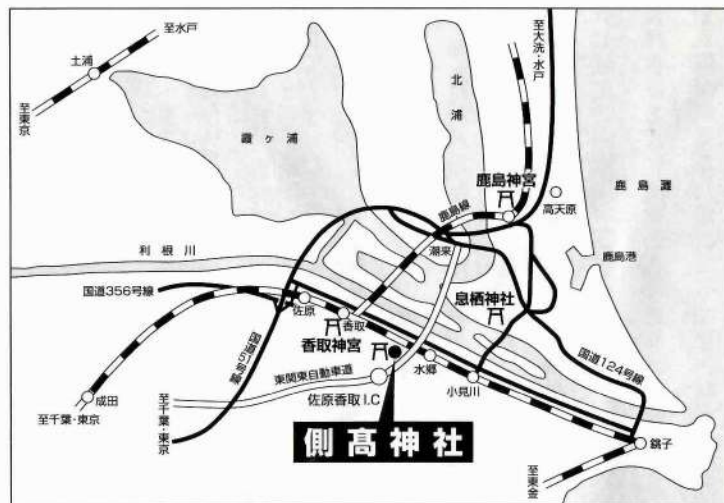
当社の宝物として、元文四年に香取神宮より授与された差定(一種の神札)が保存されている。この中に、脇鷹天神を以て大行事と為して礼し定めしむべしと、側高天神の御神号が記されている。(脇鷹側高)香取神宮の大祭に当番となった祠員(神主)等は此の差定を受けて、約往復八杆の山道を、百日間も側高の浜に通いつづけ、身を清めてから、側高神社に額き大願成就を祈ったと伝える。

差 定



香取神宮の祠員、側高の浜に於て身を清め、藻幣をとるの図(香取神宮蔵)

案 内 図



側高神社社務所

〒287 0013 香取市大倉一番地
電話 〇四七八―五七一五四五
FAX 〇四七八―五七一五五七

側高神社由緒

神社正面



一、鎮座地

千葉県香取市大倉一番地(地名―側高)

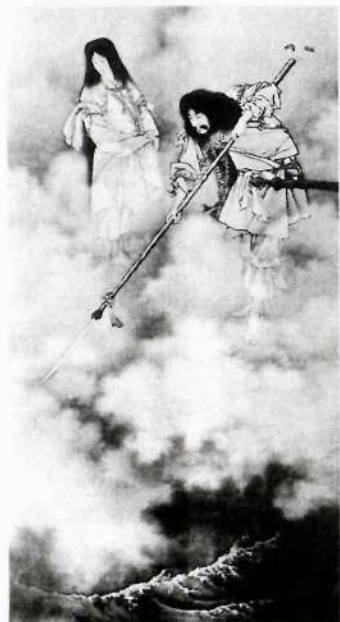
JR成田線 佐原・香取・水郷・各駅下車が便
東関東自動車道『佐原香取』より車で約七分

二、創建

経津主神社三十六ヶ深秘書(長保二年香取大宮司神主左馬頭從五位上武名の奥書あり)に、瓊々杵尊降臨之時鎮座是高天原也とある。天孫が御降臨あらせられたとき、経津主神(香取神宮の祭神)が、高天原の神を奉齋されたのが側高神社の起原である。

三、祭神

天神(造化三神)天之御中主神・高皇產靈神・神皇產靈神



四、祭神についての解説

(一) 国生み、神生みの神話

伊邪那岐神と伊邪那美神とが天神の仰せに依って日本の国土と天照大神をはじめ、多くの神々をお生みになった。所謂、国生みのところから、我が国の尊い神話は始まる。御言いつけになられた根源の神が側高神社の祭神、天神である。

(二) 明治天皇御製二首

天つ神定めたまいし國なれば

わがくにながらたふとかりけり

(註)

高皇産靈神・神皇産靈神が祭神ではないかという説をなす者もいるが、同感である。と論じているのである。その当時は「祭神深秘なり」として、只謹しみ拜むに止まっていた為、流布される無根の説に対して所信を表明したものであろう。

(4) 香取神宮の側高祭行列之図 (写真参照)

この行列の図は、香取神宮の側高祭に祭員が側高神社へ参向する有様を画いたもの(祭日霜月七日)天孫の降臨あらせられたとき天神を側高の地に奉齋されたその遷座祭以来、明治初年まで連綿として齋行し続けられた祭儀の一端を物語る絵画である。瓊々杵尊御降臨のときも斯くやと、遙かに神代の昔が偲ばれる。

五、祭神についての諸説

古来、祭神は「言わず語らずの神」として口外を戒められた為、近郷住民の間に様々な祭神説が生まれ、飛躍した憶説も伝えられている。文書や言い伝えに依る祭神説の中には、伊邪那岐神、天照大神、神功皇后と確かな根拠を以って論ずるものも多い。神功皇后祭神説は神功皇后の当社に

(註)

明治天皇の大御心は、天つ神の御心そのものであらせられたと拝す。宇宙万有の親神を天神と申すのであるが、理論的に解説することは大変むずかしい。

目に見えぬ神の心に通ふこそ

ひとの心のまことなりけれ

(註)

目に見えぬ神の心とは天神の御心のこと、造化三神を隠り身の神という。五官に依って認識出来ぬ神であるから御姿は御幣を以って表現する外にない。因に当社に於いては隠れ姿を以って御形代とする。

(三) 祭神のことを記す古文書

(1) 経津主神社三十六ヶ深秘書(之は創建の項二で述べたので省略)

(2) 元文四年の差定(末尾(四)の註で述ぶ)

(3) 香取神名記(明治十五年版)

明治時代に於ける香取神宮の神官伊藤泰歳翁の香取神名記は、側高神社の祭神について「一云、皇産霊大神」と記す。

対し奉る御信仰が取り分け厚くあらせられたことがこの説を生んだものと思う。

六、主なる神事

(一) 正月十日祭

(別称佐原市無形文化財
髭撫祭)



祭当番、髭撫での作法に依って10杯目の盃を勤める



豪快!! 15杯目を一気に飲み干す



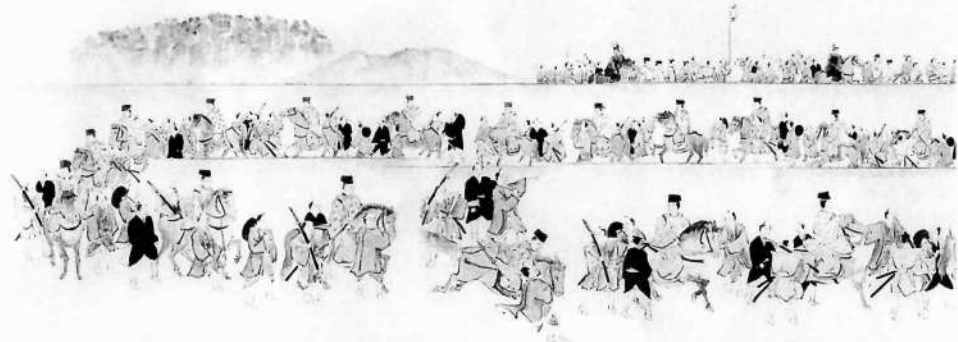
応戦する請当番



霜月七日側高祭 香取神宮より側高神社へ向う行列の図

髭撫祭と言う方が一般的、毎年新年早々、一月第二日曜日に行う特殊神事である。元々祭当番引継ぎの神事として行われるもので、当番を受けた組員の潔齋は極めて厳格。即ち毎月月頭七日間と十五日、二十八日には厳寒でも水垢離をとり、家内と起居を別にして自ら煮炊きした御食を神前に供えたと云われる。此の祭の由来は、氏が氏族別十八組に編

成されていて毎年交互に奉仕する。当屋等の各役割は、昔乍らで一族の本家分が、代々当屋をつとめる。(当屋の主を當頭という) 当番を受けた組は、身を潔めて祭費の調達等翌年祭事の準備をする。起源は健保二年(1214・鎌倉時代)、経津主神の御神徳を称え、国土の平安、五穀豊穰、子孫繁栄を祈念して始められたものと云われ、質朴勇壮なる酒祭である。当番の組と翌年当番(受当番)の二組が東西に分れて参拝者見物人の声援を受けながら酒の飲み競べをする。当番の組員は此の日の為に髭を生やし、紋付羽織袴に威儀を正して出場し、髭を撫でる仕草をして相手方に酒をすゝめる。神前には酒樽が供えられ、参拝者の誰彼なく御馳走する。鼻下のあたりを撫でた者には大杯になみなみと神酒がそ、がれる。旧記に『強いて三杯飲みましむる例あり』とあって、髭撫で三杯とも呼ばれる。祭当番の受当番に対する献盃もはじめは恭しく行われるが、次第に荒々しくなり豪毅さを競う応酬となることすらある。見物席からは、野次や声援が飛び参加組員は、勇を振るって先祖伝来の意地を見せる。初献から七献までの献盃で、満献の盃は組頭又は組の重役が丁重に拝受する。広く世の人々に神の恵を振る舞うのがこの祭の真髄である。



(香取神宮所蔵)

(二) 例大祭

元来は、香取神宮の側高祭として毎年霜月七日に齋行されたもの、香取神宮の総神官八十有余人が之に参加し、神宮年間祭祀のうちの最重要であった。明治の初め、香取神宮との祭祀の關係が分離されるまでは、夜の祭典であつたので香取から側高に至る沿道の住民は延々と篝火を焚いて祭員の行列を送迎したといわれ、今も火焚き神事の

名が残っている。明治の改革に依つてかつての盛儀は簡略化されたが、香取神宮より祠員が派遣されてわずかに古儀が保たれている。十二月七日が現在の例祭日。

(註) 夜の祭典であつたのは、天神奉齋のときの遷座祭がこの祭の起源の故である。

七、境内の樹木

境内、社地山林には、杉、榎、椎、楠、樺等の木々がうつ蒼と繁茂し、神社の歴史を物語る。中でも目通り二丈二尺の杉の太木は一際樹勢が盛んで千年杉と呼ばれる。社殿正面境内の一隅に立つ榎の古木は目通り八尺余り、北總のこのあたりが自生の北限といふ説もある。

風の言葉に通ずる此の木は平和の象徴として尊ばれる。



御神木



社殿（昭和天皇陛下御在位60年奉祝記念事業として修改築）

側高神社は元来が香取神宮第一の摂社であるから、側高神社の由緒は香取神宮の由緒でもある。又香取神宮の由緒は側高神社の由緒でもある。このことは香取神宮と鹿島神宮との関係についても言へる。一口に「香取鹿島」という様に、香取神宮（祭神・経津主神）と鹿島神宮（祭神・武甕槌神）とは左右一体の神で、両神は神代の昔、天照大神の勅命を奉体して相共に国土平定の大任を成就せられた建国の大功神である。従って香取、鹿島両神宮の間には密接不離なる関りのあることは申すまでもなく、各摂末社のことについても又同様である。そこで両武神が何故この東国の香取・鹿島の地に御鎮りになられるのか、その理由について考えてみたい。

二柱の神は単なる武力の神ではなく、天神奉齋の重責をも兼任された祭祀の神でもあった。経津主神は別名を齋主神と申し上げる如く天神を側高の地に奉齋され、武甕槌神は「高天原」と呼ばれる聖地に天神を奉齋なされ、祭祀の大使命も成し遂げられたものと考えるのが至当であろう。

香取神宮の側高山、鹿島神宮の高天原両聖地共に両神宮の東北東約二軒半ばかりの所に位置していることも偶然の符合ではない。そして、更に東北東という方向は高千穂（宮崎県）や大和地方（奈良県）よりしても略同方向である。このことは瓊々杵尊以来、御歴代の天皇が天神を遙拝せられた方向、即ち地上に奉齋された高天原の方向であったことを示す。経津主神社三十六ヶ深秘書に「遙宮側高之山也」と記されていることに依って古代祭祀の形態は明らかである。斯く両武神は聖地守護の大神を遂行して香取、鹿島の地に御鎮りになったものである。

八、古くより信仰の例証

(一) 神使の鳥「鷹」

鷹は、側高神社のお使の鳥として、気品と威風を尊ばれる。勇徳兼備の武將経津主神に見たてたものであろう。当社伝来の社号額には「側鷹大明神」と高を鷹に当てて書かれてある。鷹は聖地を護り、神意を伝える気高き鳥として特別に保護され崇められたものであろう。



日清戦争に於ける黄海の海戦の折、まさに出撃せんとする高千穂鑑のマスドに一羽の鷹がとまって瑞祥をもたらした話は有名であるが、戦後海軍の一士官が、鷹にゆかりのある当社を訪れ懇に報賽の意を表されたと言う。之は鷹にまつわる吾が社の戦後余話である。



往古の社号額

(二) 日暮家（神崎町小松）の氏神社

明和九年（1772）日暮家の奥庭に奉齋した氏神社（平石）の正面に、側高明神、息栖明神と中央下に水風両神と刻まれている。実は側高の浜に祀られる瀬織津姫神と息栖の浜に祀られる伊吹戸主神、水の神、風の神と崇めその当時の主が勤請したものである。

（註）側高神社は、香取神宮の摂社、息栖神社は鹿島神宮の摂社でここにも両社の左右の関係が見られる。



(三) 鎌形金兵衛宅（氏子）所蔵の掛軸

氏子の鎌形家に、先祖伝来の掛軸が秘蔵される。この掛軸（写真参照）には、側高の神と香取・鹿島二神の御姿が極彩色で画かれている。側高の神の坐します下に、両神が随



側高の神

鹿島の神
香取の神

神の形で控える絵である。絵師又は画かせた者の主観に依るものとは云え古くよりの尊崇の一面と側高の神の灼かさを物語るものとして貴重。